令和元年度受賞パンフレット

“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第17回 オーライ！ニッポン大賞

主催：オーライ！ニッポン会議（都市と農山漁村の共生・対流推進会議）
協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構
後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

「オーライ！ ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

第17回　オーライ！ニッポン大賞　講評

都市と農山漁村の共生・対流に関する優れた取り組みを表彰するオーライ！ニッポン大賞は、第17回を迎えることができました。これもひとえに現場で活動されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ、関連団体及び地方自治体等関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

都市と農山漁村の共生・対流とは、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動です。日本全体が活力ある社会を継続するためには、その役割はますます重要となっています。

さて、今年度は全国からオーライ！ニッポン大賞79件、ライフスタイル賞14件、合計93件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

第17回オーライ!ニッポン大賞の全応募内容を分析してみると、約半数が、農業体験やグリーン・ツーリズムの取り組みでした。次に多いのは、地域の農林水産物を活かした料理体験などの食の体験や加工など６次産業化の取り組みです。三番目は、都市生活者対象、地域内の関係者に向けた研修や人材育成、サポーターの育成や農山漁村地域のモノ、コト等の情報発信でした。人と人とを結ぶ役目や農山漁村の魅力をSNS等で発信する仲間づくりの活動が増えています。

都市部からの移住や都市と農山漁村を行き来する二地域居住等、個性的で魅力的なライフスタイルを実践し、共生・対流のモデルとなる個人を表彰するライフスタイル賞では、農山漁村に移住して自分の理想とするライフスタイルの実現、語学やアート等の専門的技術を活かした活動、子育て世代の移住者の活躍と農山漁村の地域活性化に新しい可能性をもたらすものと期待されます。

審査委員会における選考の結果、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ！ニッポン大賞3件、審査委員会長賞3件、ライフスタイル賞4件の計11件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「一般社団法人　そらの郷」（徳島県三好市）は、千年以上も受け継がれてきた山里の暮しそのものを地域資源として、体験プログラムの開発や交流による地域食資源の活用を通じて、地域の農業と文化を守り、観光との連携を図り、誘致活動を展開するDMO組織です。

伝統的な農業が世界農業遺産に認定されたことにより、地域に住む人々や伝統的な農業に対する関心が高まり、日本の原風景として、内外から高い関心を呼んでいます。

エコでエシカルな消費、持続可能なライフスタイルを目指す発想は、IT・グローバル社会のなかで、若者の移住者増加も期待されます。畑を歩くだけの体験プログラムなど、共感型交流が農山村の価値と産業構造を変えるという発想は革新的と高く評価されました。

その他の各賞の活動は、それぞれのページに紹介しておりますのでご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに充実した活動を継続されて再度のご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、関係するすべての皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げるとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせて頂きます。

令和2年3月24日
オーライ！ニッポン大賞
審査委員会
会長　　安田　喜憲

第 17 回オーライ！ニッポン大賞 受賞者一覧

オーライ！ニッポン大賞グランプリ

1 徳島県 三好市
一般社団法人　そらの郷

オーライ！ニッポン大賞審査委員会長賞

5 新潟県 三条市
特定非営利活動法人
ソーシャルファームさんじょう

6 静岡県 浜松市
静岡文化芸術大学 引佐耕作隊

7 和歌山県 田辺市
株式会社 日向屋

オーライ！ニッポン大賞

2 岐阜県 恵那市
奥矢作移住定住促進協議会

3 岡山県 津山市
あば村運営協議会

4 長崎県 大村市
有限会社 シュシュ

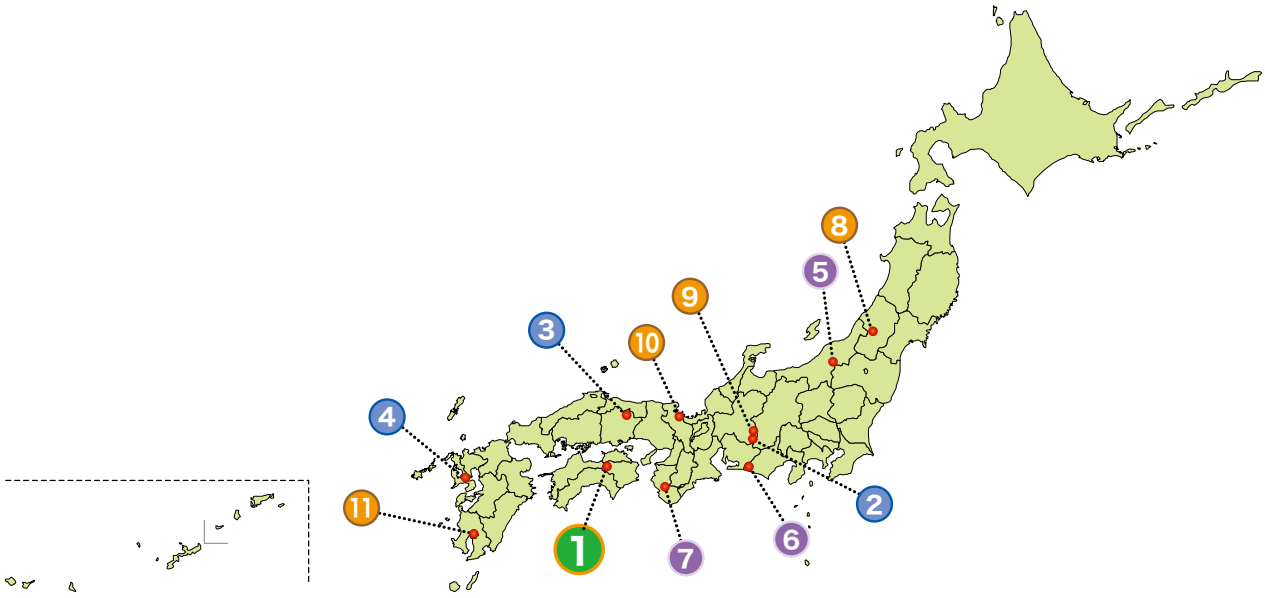
オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

8 山形県 朝日町
志藤 一枝 さん

9 岐阜県 白川町
塩月 祥子 さん

10 京都府 舞鶴市
岡山 茉莉 さん

11 鹿児島県 霧島市
和田 新藏 さん



「オーライ！ニッポン会議」の事務局を構成する 20 団体

(公社)全日本郷土芸能協会
(公社)日本観光振興協会
(一財)伝統的工芸品産業振興協会
(一財)地域活性化センター
(公社)日本環境教育フォーラム
(一財)漁港漁場漁村総合研究所
(一財)日本青年館
(公社)日本青年会議所
(一財)地域開発研究所
(公財)育てる会
全国水土里ネット（全国土地改良事業団体連合会）
(一財)都市農山漁村交流活性化機構
(公財)日本修学旅行協会
日本商工会議所
(公財)日本離島センター
(公財)パブリックヘルスリサーチセンター
(公財)全国修学旅行研究協会
全国商工会連合会
(公財)都市計画協会
全国森林組合連合会

オーライ！ニッポン大賞グランプリ

一般社団法人 そらの郷（徳島県三好市）

内閣総理大臣賞

エコでエシカルな消費、持続可能なライフスタイルを目指す発想は、IT・グローバル社会のなかで、若者の移住者増加も期待されます。畑を歩くだけの体験プログラムなど、共感型交流が農山村の価値と産業構造を変えるという発想は革新的と高く評価されました。

■受賞の内容

【千年続く循環型の伝統農業】

千年以上も受け継がれてきた山里の暮しそのものを地域資源として、体験プログラムの開発や交流による地域資源の活用を通じて、地域の農業と文化を守り、観光との連携を図り、誘致活動を展開するDMO組織です。徳島県西部の美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町の二市二町の広域連携で観光地域づくりに取り組む団体として、「そらの郷山里物語協議会」を発展改組して発足しました。

教育旅行は農家民泊を中心に、急傾斜地での農作業、野菜や果樹の収穫、田舎料理作り、歴史探訪、かずら細工、わら細工の伝統工芸、阿波おどり、地域の人との交流などをプログラム化しています。厳しい山村環境の生活文化が世界から高く評価されるようになり、地域の生活文化に対する誇りや自信、その文化を継承していくことを再認識されるようになっています。

また、伝統的な農業が世界農業遺産に認定されたことにより、地域に住む人々や伝統的な農業に対する関心が高まり、日本の原風景として、国内外から高い関心を呼んでいます。

【世界農業遺産に認定の傾斜地農耕システム】

にし阿波の山間部は、平地が少なく急傾斜地そのものを耕地として耕し、作物を採り暮らしてきました。傾斜地では風雨などにより、土壌流出が起こるため、干したカヤのコエグロで畑の畝の間に敷き詰めて流出を最小限に食い止めたり、等高線に沿って畝立てしたり、サラエと呼ばれる伝統農具で土上げをするなどして土壌を守ってきたのです。コエグロとは、秋に収穫したカヤを束ねて円錐形に積み上げたもので、土壌流出を防ぐほか、春には土を育てる肥料として使われています。この土地に負担をかけない自然循環型の「傾斜地農耕システム」は、千年以上の太古の昔より先人から継承されてきたことが農業遺産に認定された理由です。

【農山村の産業構造を変える共感ツーリズム】

「ナショナルジオグラフィックトラベラー」誌（2012年）に取り上げられたことを契機に世界中から外国人観光客が来訪することになり、戸惑いがあった農家のお母さんたちも今や訪問を楽しみに待っています。言葉はわからなくても長年山間に伝わる農業やその農業から得られる伝統的な食事などの生活文化に来訪者の尊敬のまなざしが確実に農家や地域に住む人々の意識を変えています。言葉の不自由もなんのその、フランスからのお客様にハグで迎える「共感ツーリズム」の可能性が見えてきました。山の暮し、住んでいる人の日常を体験してもらうことにより交流の付加価値を創造していこうとする取り組みは、どこでもできる、自信をもって取り組みましょう！と全国に伝えていきたいと思います。これからは「エコでエシカルな消費が共感を得る」、農林漁業や農山漁村のフィールドだからこそ持続可能なライフスタイルが実践できる、という発想から、急斜面の畑を歩くだけの体験プログラムが生まれました。循環型農業のある生活体験は、新たなビジネスをつくり農山村の産業構造を変える可能性を持っています。

■受賞者の概要

活動年数：9年（前身活動16年）　**活動日数**：365日
活動エリア：美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町
活動を担う人数：11人（スタッフ10人）
参加者数：体験型教育旅行21団体　2,760人
外国人富裕旅行ツアー　392人

■写真の説明

・（写 真 左）「そらの郷」を上空から見る
・（写真中央）コエグロ作り体験
・（写 真 右）阿波踊り体験

■連絡先

〒778-0005 徳島県三好市池田町シマ995番地1
☎ 0883-76-0713
https://nishi-awa.jp/soranosato/

奥矢作移住定住促進協議会

（岐阜県恵那市）

地元の大工さんからリフォーム技術を教わる「古民家リフォーム塾」の作業を通して、地元住民とも交流しながら互いに、人となりを知ることで、移住がスムーズに進んでいます。移住者が続出するリフォーム塾の魅力的な講座に高い評価がありました。

■受賞の内容

【地域外からの人材を移住に繋げよう】

奥矢作移住定住促進協議会は、空き家の有効活用による地域の活性化及び地域コミュニティの活性化を実現するために空き家の調査・活用、就農・就労支援など移住定住のお手伝いをするために2011年3月に発足しました。奥矢作地域では、約300世帯のうち36戸が空き家になっており、面積の8割が山林。地域に人を取り戻すため空き家を地域の資源としてとらえ、地域外からの人材を移住に繋げようと、都市と農村の交流事業を開始しました。

【子育て世代の移住が学校の存続を守る】

2000年9月、最低気圧925hPaの台風14号（激甚災害に指定され東海豪雨）の大水害により、河川に流れ込んだ流木等の後始末に立ち上がり、その後、森林の再生と空き家対策に乗り出しました。

大島会長は、退職を契機に仲間たちとNPO法人 奥矢作森林塾を設立して、山の手入れを進めダムに流れ込んだ流木を片付ける炭焼きの窯を国土交通省事業で設置処理するとともに、高齢化による空き家問題の解決には、農林水産省事業により持ち主を探し意向を調査しました。意向調査により村に戻らない空き家（譲っても良い）を移住者の受け入れに活用しようと考えて、古民家のリフォームをみんなでやってみようではないか？という企画を立案実行しました。移住希望者の呼びかけに苦労しましたが最初の塾の参加者が3人移住したことをきっかけにクチコミ等で広がり、移住後、新規就農した若者は東濃地区の野菜部門で優秀賞を獲るほど活躍しています。また、協議会の事務局も移住者によって担われているほか、小学校を廃校の危機から守る子育て世代の移住が効果を上げています。

【大工さんの技を学べるリフォーム塾】

全国から田舎暮らしをしたい人を募集し、1泊2日の「古民家リフォーム塾」を年間約10回開催しています。移住希望者が購入・賃借した空き屋を地元大工の指導のもと、古民家リフォーム塾参加者、ボランティアが一緒に改修します。塾生は地元のプロの大工さんに指導を仰ぎ、安全対策も含め、家を作るための基礎技術を習得しながら古民家を自分の住む家として改修します。大工道具の使い方、手入れ方法など基礎から学べることが人気の秘密です。継続参加すればリフォーム技術も深く学べ、四季折々の地域の風情も感じられます。

同じ釜の飯を食べる機会も増えることは、互いにその“人となり”が分かり、移住前に気心も知れます。

最初にリフォームした古民家は、囲炉裏や釜土のある暮らしが体験できる体験施設、結の炭家（ゆいのすみか）として再活用されています。みんなが泊まる場所、わいわい騒ぐ場所もありませんでしたが、結の炭家（ゆいのすみか）をみんなの手で一緒に作り上げたことは大きな自信となりました。

■受賞者の概要

活動年数：9年（前身活動2年）
活動日数：96日（延べ1,123日）
活動エリア：奥矢作地域（恵那市串原地区及び上矢作地区）
活動を担う人数：4人（スタッフ2人）
参加者数：576人（延べ8,984人）

■写真の説明

・（写 真 左）古民家リフォーム塾
・（写真中央・右）移住者による森林再生事業の様子

■連絡先

NPO法人 奥矢作森林塾
〒509-7816 岐阜県恵那市串原827
☎ 0573-52-2217

あば村運営協議会

（岡山県津山市）

地域住民組織が自ら立ち上がり、地域の存続をかけて、コンパクトビレッジに相応しい拠点づくり、地域ブラン開発による雇用の確保、都市農村交流を通じた移住定住の促進の３つの施策を展開。地域内循環・地域自治の確立を目指すロールモデルとして大いに期待できると評価されました。

■受賞の内容

【地域からお金を流出させない】

村は無くなっても“むら”はある。市町村合併により中山間地域にあった公的サービスがどんどん縮小しているなかで、地域住民が自ら様々な事業を担い、生活を守っていく先進事例です。漏れバケツ理論により、地域からお金が流出しないように、住民出資の合同会社を立ち上げ、ガソリンスタンドや商店など地域内のサービスの循環体制を調えました。また、特産品づくり、ツーリズム（視察も含め）、再生エネルギーなど組み合わせて地域の外からお金を稼ぐ仕組みを作りだしています。あば温泉や宿泊施設等を連携させながら、インバウンドツアー、体験ツアー、視察ツアーをそれぞれの主体が企画実施し2012年からの7年間で29世帯 59人（延べ数）が移住やUターンしました。

【小さな拠点による暮らしの支え合い】

地域の誇りを再確認し、新しいむらづくりを進めようと合併から10年となる2015年2月に「あば村（むら）宣言」を内外に宣言し、あば村運営協議会を結成し取組を始めました。協議会は8集落の自治会から成る「津山市連合町内会阿波支部」、農業や農産加工を担う一般財団法人あばグリーン公社、JA撤退後のガソリンスタンド経営を行う住民出資の合同会社あば村、高齢者の足の確保（交通空白地有償運送事業）や環境保全活動を行うNPO法人エコビレッジあばなどを構成員とし①小さな拠点づくりによる暮らしの支え合い②あば村ブランドの開発・流通による仕事づくり③都市・農村交流を通じた交流人口の拡大、移住・定住の推進の3活動「ローカル・アバノミクス3本の矢」を展開しています。

特に第3の矢では、地区の中心部にあるあば温泉と宿泊施設「あば交流館」を中心に他の施設と連携させながらの取組を進め、2019年5月には、地域の「宿泊」「食事」「体験」を提供できる関係団体・個人により「あば村農泊推進機構」を立ち上げました。コンテンツのブラッシュアップやプロモーションの強化の取組を行うとともに、阿波地区の自然や景観、暮らし＝風土と食を体験していただく「ふうどツーリズム」や旧小学校の体育館を活用した「スポーツツーリズム」、地域に豊富にある森林資源や木材を活用とした「ウッドツーリズム」などをそれぞれの主体が企画・実施。この間、台湾からの定期的なツアー、協議会への視察（年間31団体430名余り2018年度実績）等、食事や宿泊を地区内施設へ誘導することで地域への経済効果も生まれています。さらに、SNSの情報発信により、あば村へのファンづくり、移住・定住にも繋げています。

地域の消費が地域内で循環するなどの経済効果は大きく、また、あば商店が買い物支援や地域のお年寄りのサロン的役割を果たすなど経済効果だけでは測れない効果を生んでいます。今後も地域内での経済やエネルギー、コミュティの循環をさらに強め、地域の自立に繋げていきたいと考えています。

■受賞者の概要

活動年数：6年（前身活動5年）
活動日数：300日／年（延べ1,800日）
活動エリア：津山市阿波地区
活動を担う人数：500人（スタッフ1人）
参加者数：約5,000人（延べ約30,000人）

■写真の説明

・（写 真 左）阿波小最後の運動会
・（写真中央）あば商店とガソリンスタンド
・（写 真 右）阿波地区の中心部

■連絡先

〒709-3951 岡山県津山市阿波1220番地
☎ 090-7502-2456
http://abamura.com/

有限会社シュシュ

（長崎県大村市）

80人の社員、年間参加者49万人。農泊事業、6次産業化、体験型観光、定年帰農者の農業塾等々で地元の雇用拡大と農家所得の向上に貢献。地元特産品による商品開発力など自立心と持続性は高く評価されました。

■受賞の内容

観光農業で消費者に感動を与え、後継者に希望を与える夢のある新しい農業を目指した取り組みにより、第5回審査委員会長賞を受賞。さらに都市と農村の交流活動を発展拡大させ、大村市グリーン・ツーリズム推進協議会の事務局、農泊事業などを展開。わが国を代表する農業テーマパークであり、農的暮らしへの入口となっています。

【農業の未来は明るい！女性の活躍が光る農業施設】

今から40年程前から梨やブドウの観光農業が盛んでしたが、収穫時期は8月から9月の2カ月間での営業であったので、地域農業の将来を考えた時、収穫時期以外に観光客を呼ぶにはどうしたらいいか、後継者を増やすにはどうしたらいいかを農業発展に情熱を傾けた専業農家8名が議論を重ね、2000年4月に農業交流拠点施設おおむら夢ファームシュシュをオープンしました。

農産物直売所を開設し農家所得の安定を図り、さらにアイス工房・パン工房・レストラン・食育体験施設・洋菓子工房・農産物加工センター・イチゴ狩り・梨狩り・ぶどう狩り・ブルーベリー狩り等を運営し、楽しめる農業交流拠点施設は、現在では年間約49万人の来場者が訪れる農業テーマパークとなり、従業員80名の内8割が女性で女性活躍の模範として地域の活性に大きく貢献しています。

また、大村市グリーン・ツーリズム推進協議会の事務局機能も担っており（事務局シュシュ・同職員が常駐）、現在は農泊事業によりインバウンドの受け入れも積極的に取り組に、これまで20カ国からの受け入れをしました。

【農・食・体験が感動と雇用を生む】

見る観光から体験型観光へと変化は、農業体験（イチゴ狩りをはじめ梨狩り･ぶどう狩り･ブルーベリー狩り等）、自社直営農場や地域の農家20カ所と連携して、年間2万人を受け入れています。また移住し就農を希望する方々を対象に農業インターンシップや農業研修生受け入れ制度の他に、定年帰農者を対象とした農業塾を毎月2回開催し現在まで延べ2500人が参加しています。食育活動では、特に小学生や中学生を中心に親子で参加できるウインナー作りやパン作り・ピザ作り・イチゴ大福作り等を通して食の大切さや作る喜び、感動を体験して年間9300人が参加、保護者も大喜びです。

農家レストランでは『地元の旬の農産物をふんだんに使用したランチバイキング』や大村産の牛肉、豚肉を使用した焼肉等楽しむ事が出来るほか、自社加工による農業の6次産業化にも取り組んでおり、地元の農畜産物を使用したジェラートやシャーベット・プリン・パン・ケーキ・ジュレ・ジュース・焼肉のたれ・レトルト加工品等商品化に取り組み、それらの商品がお土産としても大変喜ばれて雇用の拡大や農家所得の向上に大きく貢献しています。

■受賞者の概要

活動年数：20年
活動日数：353日（延べ7,180日）
活動エリア：長崎県大村市
おおむら夢ファームシュシュ
活動を担う人数：80人（スタッフ80人）
参加者数：約49万人（延べ約860万人）

■写真の説明

・（写 真 左）おおむら夢ファームシュシ
・（写真中央）新鮮な野菜と果物･季節の花々『新鮮組』
・（写 真 右）ぶどう畑のレストラン

■連絡先

〒856-0005 長崎県大村市弥勒寺町486番地
☎ 0957-55-5288
http://www.chouchou.co.jp

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

特定非営利活動法人ソーシャルファームさんじょう（新潟県三条市）

地域おこし・活性化は、人財集積が重要であるという考えの基に、行政・学・異業種・農業生産者が連携協力して、廃校を活用した滞在型職業訓練施設・塾や耕作放棄地対策を展開し地域おこし協力隊の活躍、半農・半バスケファームの開設と斬新なアイデアと実行力に高く評価されました。

■受賞の内容

NPO法人ソーシャルファームさんじょうは、2020年までに下田を「体験合宿の聖地」にする！2030年までに下田を「移住したいまち日本一」にする！ことを目指しています。

【人財集積が地域を救う】

2015年4月「人口減でも人財増」人財集積が地域を救う信念の下、「スローバレーしただ構想」をまとめ、設立しました。スローバレーしただ理念は次の3点です。①公民連携による市民主体の共生ネットワークを基礎に、暮らす人の物心両面の幸せを追及し持続可能なまちを目指す。②農業を核とした人財育成と産業（地域）クラスターを育成集積し、経済的持続性と社会的利益を生み出す。③都市と農村・自然をつなぎ心豊かに生活できるスローライフの場と新しい故郷 フルサト（帰るべき場所）を提供し、生きる底力を身につける。

【芋焼酎から半農半バスケまで斬新なアイデアを実行に移す】

現在、実施している主な活動は、⑴下田産本格芋焼酎「五輪峠」は、地元サツマイモを使用し、地域の人が誇れる逸品をつくる取り組み。芋主さん（サツマイモの生産する農家）と協働で 2016 年から始動して4年目。売り上げの一部は、パラスポーツ支援に。また、仕上げのキャップに封緘紙（ふうかんし）のシールを貼る作業は、五輪峠の麓にある障がい福祉作業所ピュアハウスに委託し、農副連携をしています。

初年度の1,200本は発売間もなく完売。2020東京五輪の本年は4,000本の販売を目指しています。⑵三条ビーターズ ドット エグゼは、「半農半バスケ」。2019年新潟県内初の3人制プロバスケチームを発足。選手4人が地域おこし協力隊として移住し、東京在住の選手3人は、練習、試合等で東京新潟を往復しています。

地域おこし・活性化は、人財集積が重要であるという考えの基に、行政・学・異業種・農業生産者が連携協力して、廃校を活用した滞在型職業訓練施設・塾や耕作放棄地対策を展開し地域おこし協力隊の活躍、半農・半バスケファームの開設と斬新なアイデアと実行力に高く評価されました。

選手は棚田の再生や農業イベントに参加し地域と農業をPRするほか芋焼酎の原材料黄金千貫の生産などスポーツと農業で地域活性化に取り組んでいます。⑶三条市滞在型職業訓練施設「しただ塾」厚労省の求職者支援制度を活用した3ヶ月の滞在型人財育成事業。観光やアウトドアをテーマに座学やフィールドワークをしながら下田地域の暮らしを体験し、4年間で県内外から36人が受講して、卒業生7人が地域おこし協力隊や地元企業への就職などで三条市に定住しました。その他、・2017年協力隊になった元Jリーガーが始めたスポーツ合宿事業「農泊推進事業（スポーツ合宿）」・約20年耕作放棄地になっていた棚田を再生させ、田植え・稲刈りを通じて毎日食べるお米の大切さ、地域社会の生活や文化を伝える「棚田再生プロジェクト」・音楽で下田地域を元気にすることを目的に年2回のフェスティバル「リバーサイド音祭in下田」開催等を実施しています。農泊推進事業の宿泊者は、2016年度150人、2017年度500人、2018年度889人と順調に伸びています。

■受賞者の概要

活動日数：250日（延べ1,130日）
活動エリア：三条市下田地区
活動を担う人数：21人（スタッフ1人）
参加者数：2,405人（延べ7,412人）

■写真の説明

・（写 真 左）芋焼酎用のサツマイモ黄金千貫の苗を植え終わり記念撮影
・（写真中央）再生した棚田で田植えイベント、総勢50人が参加
・（写 真 右）仙台ラウンドで準優勝した3人制バスケ三条ビーターズ

■連絡先

〒955-0141 新潟県三条市荒沢1198-3
☎ 0256-64-8116
http://sfs-jp.org/

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

静岡文化芸術大学 引佐耕作隊（いなさこうさくたい）

（静岡県浜松市（はままつし））

地元農家・地権者との交流、協力による学びながらの棚田米の栽培・収穫から独自にパッケージを作成・大学生協や商業施設で販売するまでのサプライチェーンを一貫した実践は、学生らしい模範的であり、秀逸な事例です。棚田米をブランド化したスタイルは、今後の小規模生産の先進事例として大きな期待がかけられています。

■受賞の内容

【コメを適正な価格で売って棚田を再生】

2016年4月結成した静岡文化芸術大学の学生による「引佐耕作隊」は、耕作放棄地の棚田を再生すること、収穫したコメのパッケージをデザインし商品化し、コメを販売することによって持続可能な米作りを展開しています。2017年度のNHK大河ドラマ「おんな城主直虎」のロケ地としても注目された、浜松市北区引佐町久留女木（くるめき）の棚田の約4分の3は耕作放棄地。引佐耕作隊は、耕作放棄地の再生や棚田の価値を都市住民に広く伝えることを目的に社会学という立場から浜松市の農山村の現状や課題解決策、この地域の可能性を研究する舩戸修一准教授が授業の一環で立ち上げました。

引佐耕作隊は、棚田3枚（500㎡）において、地元耕作者の助言を得ながらコメ作りを行っています。作業頻度は週に1～2日（4～11月）。コメ作りは、田起こし（4月）、代かき（5～6月）、田植え（6月）、水の管理・除草（7～10月）、稲刈り・乾燥・脱穀（11月）、精米（12月）と全ての作業を学生主体で行っています。

その後、学生自身で販売用パッケージを作り「久留女木棚田の恵」という商品名で販売(1月)しています。パッケージは棚田の「多面的機能」をイラストで表現することによって、消費者に棚田について理解してもらい、購入して欲しいと考えました。2019年度は、約158kgを収穫し、1袋を300g、税込500円の価格で、大学生協や市内の商業施設において473個を販売し完売しました。販売によって得た利益は、今後の活動費用費として使用し、持続的な活動の仕組み作りに取り組んでいます。

また、地域の祭礼・イベントの運営の手伝いや神事に参加して、耕作隊が（都市部）が農村部と交流して、本活動について学生である私たちがコメ作りを通して感じたことや棚田の魅力を都市住民にどう伝えるのか等を報告する場も提供していただいています。

都市部の住民に対して引佐耕作隊を介した農村との交流の機会を創出しています。「棚田の多面的機能」が発揮され得られる恩恵は、久留女木の棚田の地権者や耕作者のみならず、都市部住民も享受しているにも関わらず、市販のコメ価格に含まれておらず、棚田の耕作者には還元されていない。私たちは、都市部へのイベント参加や懸賞論文への応募を通じて。棚田や棚田の多面的機能の大切さを発信しています。

引佐耕作隊のコメ作りは、主に久留女木に住む人たちの協力によって成り立っており、今後も地元の人たちとの「関係」を大切にしながら、コメ作りに励んでいきたいと思います。

■受賞者の概要

活動年数：4年
活動日数：55日（延べ220日）
活動エリア：浜松市北区引佐町久留女木地区
活動を担う人数：5人（5人）
参加者数：20人（延べ25人）

■写真の説明

・（写 真 左）地域住民とともに脱穀
・（写真中央）久留女木地区祭礼「川合淵祭り」の神事に参加
・（写 真 右）耕作隊自作の「久留女木 棚田の恵」パッケージ

■連絡先

〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1
静岡文化芸術大学
☎ 053-457-6111（代表）
https://www.facebook.com/InasaKosakutai/

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

株式会社 日向屋（ひなたや）

（和歌山県田辺市（たなべし））

鳥獣害をはじめ、地域の現状に危機感を抱いた地元農家の若者たちの活動は、農業の担い手不足、高齢農家の農作業受託から商品開発・販売活動、食農教育・農福連携活動まで成果を上げており、地域農業振興・地域化活性化を目指すコミュニティビジネスのモデルとして高く評価されました。

■受賞の内容

【僕らの畑は僕らで守る。農人と山の番人プロジェクト】

全国で苦労している鳥獣被害対策と特産品化の取り組みをUターンした若者が中心となって取り組んでいます。ジビエ肉を活用する飲食店が増加し、都市農村交流活動や日向屋ブランドの販売を通じ、日向地区を広くPRすることで地区のファンも増えています。また、耕作放棄地の増加に歯止めがかかるとともに地域の雇用創出、次世代への農業の魅力の継承、障がい者雇用に対する理解に繋がっています。

設立当初は地元住民のみの活動でありましたが、地域外の方も加わり、「地元の土を動かすのは地元の人間、風を吹かすのは地域外の人間」という良い構図ができあがり、次の世代が憧れる農産業の形として、カッコよく、価値を生み出し、革新的な農業を目指す【農業における新3K】を①農家による獣害対策　②農家による新しいビジネスへの挑戦　③農家による地域活動を目標としています。

田辺市上芳養（かみはや）の日向地区は、人口約1700人、主な産業は紀州南高梅と温州みかんを柱とした農業。近年、鳥獣害、担い手不足、耕作放棄地といった課題が負のスパイラルとなっていることから、これらの地域課題を解決するため、2017年に地元の若手農家が集まり、TEAM HINATAを結成。2018年には株式会社日向屋に改編しました。

株式会社日向屋では、生産・加工・流通の、新たな仕組みづくりを整備することで、大きなシナジーを生み出しています。地域の厄介者である鳥獣が「ご馳走」に生まれ変わり、うめやみかんなどの地域資源が地域内外の人と人の交流によって付加価値を産む。関わるみんなが笑顔になる。そんな未来を描いています。

【有害鳥獣駆除、ジビエ加工、日向やブランド】

Uターン就農した30代、40代が中心となり有害獣駆除や果樹の剪定を請け負い、ジビエ加工などの特産品加工販売などで地域活性化を図っています。捕獲チームの結成や狩猟者が増えたことで、地域の鳥獣被害が減少するとともにジビエ肉を活用する飲食店が増加しました。

① 鳥獣対策および都市農村交流活動

若手農家で捕獲チーム（狩猟免許を取得）を結成し、有害鳥獣を捕獲するとともに、ジビエ加工施設「ひなたの杜」を誘致。施設が稼働することで、狩猟者が増え、さらに鳥獣害が減少。また、ジビエ肉の食べ方の提案や、鳥獣の捕獲から解体、食すまでの体験会や柑橘の収穫体験等の都市農村交流活動を企画、実施しています。

② 地域農業の活性化にむけて

担い手不足、高齢化による農業の生産性低下に対し、梅の剪定作業、草刈り、伐採作業等の農作業を積極的に受託するとともに地元産みかんを買取り、ジュースやゼリー等の商品を開発し、日向屋ブランドとして販売。また、地域の保育園や障がい者支援施設と連携し、耕作放棄地を活用した農産物の生産・販売活動に取り組む等、児童たちへの農業教育と農福連携活動を実施しています。

■受賞者の概要

活動年数：2年（2年）
活動日数：100日（延べ250日）
活動エリア：田辺市
活動を担う人数：8人
参加者数：180人（延べ350人）

■写真の説明

・（写 真 左）（株）日向屋代表取締役　岡本和宜
・（写真中央）ジビエＰＲ
・（写 真 右）狩猟の様子

■連絡先

〒646-0101 和歌山県田辺市上芳養755-2
☎ 080-3806-2716
https://team-hinata.com/

オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

「だいちゃん農園 GUEST HOUSE」オーナー 志藤（しとう） 一枝（かずえ）さん (61才)　(山形県朝日町（あさひまち）)

農家民泊、自家製りんごでスイーツ開発、外国人客おみやげ向けの商品の開発など多岐にわたる活動は、地元の国際交流の要になっています。地域活性化に貢献してきたライフスタイルは称賛に値すると高く評価されました。

■受賞の内容

【農村の文化を世界に発信したいと農家民宿開業】

結婚を機に千葉から山形に嫁ぎ、英語塾主宰を経て町の保育園に勤務。得意の英語を生かし32年間、ホームステイボランティアのホストを務め、全世界の人々との交流から山形県と朝日町の文化を世界へ発信したいと考えていました。また、不登校だった長男と一緒に農業に従事し、土を耕すうちに心も耕され、自分の夢を実現したいと、元気を取り戻しました。これを転機に山形県の「里親」に登録し、不登校やニートで心の闇を抱える青年達を、農業を通してサポートする『農家民宿』を開業しました。

農家民宿に泊まったゲストとの親密な交流は、山形大学の留学生からは、私を日本の母として頼ってくれるようになり、昨年の夏に彼女の故郷であるインドでの結婚式に日本の母親として参列しました。その後、このご夫婦は、共に石川県で職に就いたことから、山形で再度、日本式の神前結婚式を山形大学と連携して行いました。

台湾からのリピーターは、農園でのフルーツ狩りや山形の伝統料理体験、朝日町内の文化祭などを毎年楽しみに農泊しています。特に茶道・着付け・習字に関心が強く、地域の日本文化を指導する先生方の知恵袋を生かして、相互の異文化交流が活発化し、町民からも微笑ましく、身近に外国の方がいるだけで町が活性化していくと期待されています。

また、国内ゲストとも農産物の贈答注文販売や農業体験などから交流が深まり、各地を往来しています。ゲストとの食事では、農や食にまつわる会話を楽しんでいただくことにより、食したサクランボやリンゴ、米などを買いたい、送りたいなど注文販売に繋がっています。このことにより、長期的な関係に発展し、「長野にも先進的な農家民宿があるから参考にしてみたら」と勧められて訪問し、農園や農家民宿の経営の参考にもなっています。

【自家栽培のリンゴスイーツを開発】

６次産業化にも取り組み、自家栽培のりんごを素材にした新しいスイーツを開発し、東京をはじめ、全国主要都市への物産展や駅での試食・販売も実施しています。また山形市の“かすり屋和菓子店”とコラボしたりんご･麹･チーズクリームの餡を「どら焼き」の中に包み込んだ『麹焼き』は、海外からのゲストの試食を重ねながら、インバウンドへのお土産品として商品化に至り、「日本の宝物グランプリ山形大会」でグランプリを受賞。大福の中に餡を入れた『りんごと麹のマリアージュ』は全国大会でベストライス賞を獲得しました。このりんごスイーツをタイにも販売しようと、商談を進めています。

■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】32年
【地域での実践活動】10年

■写真の説明

・（写 真 左）外国の方々との交流「りんご狩り」
・（写真中央）子供たちの課外授業
・（写 真 右）山形大学･留学生が日本で神前結婚式を挙げました

■連絡先

〒990-1302 山形県西村山郡朝日町大字玉ノ井丁202
☎ 0237-68-2301
https://www.daichanfarm.com/

オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

一般社団法人アートアンサンブル白川
（黒川を愛する集落支援員）

塩月 祥子さん（42才）　（岐阜県白川町）

自ら有機農業を支援する“はさ掛けトラスト”発足、自然素材でできたストローベイルハウスをセルフビルド、得意分野のアートを生かして団体の立ち上げ、イベントの主催と次から次へと新たな課題に取り組み、地域を活性化する姿に脱帽。今後は集落支援員として地域づくりへの貢献も期待したいという意欲と実行力を高く評価されました。

■受賞の内容

武蔵野美術大学でデザインを学び、結婚を機に名古屋に帰郷。予備校のデッサン講師などを経て、白川町に移住しました。2004年、第一子出産。食物アレルギーをきっかけに、悩みに悩んだ末、自分たちの生き方自体を変えたいと田舎暮らしを決意。同時期に雑誌「自給自足」で藁と土の家“ストローベイルハウス”を知り、建築の勉強をしていた夫とともに、自然素材で造る家づくりにはまり、自分で設計したいという夫の夢と、幼い頃から自分でデザインした家に住みたいと思っていた私の夢が重なり、里山で建てたい！との想いを同時に抱くようになりました。ストローベイルハウスとは、圧縮した藁をブロック状にして積み上げ、その表面に土を塗り重ねて仕上げる家です。環境に負荷をかけない建築として、世界中に広まっています。自分たちでストローベイルハウスを建てたいと考えたが、無農薬の藁を使いたいが長い藁でないと加工できないため、昔ながらの"はさ掛け”をする米作りをしようと2006年、「はさ掛けトラスト」”を立ち上げました。はじめて白川町黒川を訪れたその日に、ビビビっときて、移住を決意。2007年、待ちきれなくて2人目が産まれて1ヶ月半での強行引越しして、「はさ掛けトラスト」の活動をしながら、地域の中で生活を始めました。お米・味噌・豆を自給しつつ2008年、夢のストローベイルハウス建設地を決め、2009年、3人目を出産し5人家族になりました。お世話になっている黒川の農家さんの山で建材用のヒノキを切らせてもらい、地元の木こりさんに頼み新月の日に伐採、1年かけて乾燥させて2010年ストローベイルハウス建設を開始しました。建築における技や知恵を残したく在来工法で建設です。建前までは、地元の在来工法の知識をもつ大工さんに依頼、その後は主に夫が造り続け、私も第3子をおんぶして土塗りをするなど、家づくりを手伝いました。

2017年、白川町をアートで盛り上げたいと、夫と共に「一般社団法人 アートアンサンブル白川」を設立。2018年10月初回イベント「アートであっとおばけやしき」を地域の芝居小屋「東座」で開催。2日間で445人集客。以後アーティストインレジデンスの活動を続けています。2019年、まちづくりへの熱い思いから集落支援員に地域の推薦も受けて就任。移住案内、相談、黒川地区のホームページ制作、毎週美味しいスイーツを食べながら、子育てや教育について語れる場の黒川こどもミライ会議の企画運営をしています。また、町内に高校がなく、通うのが大変、選べないなどとの理由で子育て世代が町外へ出て行く、戻ってこない問題解決に役場や地元企業にかけあう等々、奔走中です。ますます黒川地区への愛が深まり、まちづくりへ思いも強くしています。知れば知るほど面白い、出会えば出会うほどステキな人ばかりです。子育て世代の移住者も増えており、子育てしやすい地域、暮らしていて楽しい地域として、さらに広く発信し、帰ってきたくなる地域、移住したくなる地域にしていきたいです。

■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】12年
【地域での実践活動】13年

■写真の説明

・（写 真 左）こどもアート
・（写真中央）ストローベイルハウス建築中
・（写 真 右）移住仲間と塩月邸

■連絡先

〒509-1431 岐阜県加茂郡白川町黒川2584-4
☎ 070-2631-4100
Facebook　塩月（春日井）祥子

オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

インスタグラムフォロワー数13万人超のまんが家　岡山茉莉さん（32才）　（京都府舞鶴市）

幼児三人を抱えながら、元気に楽しく暮らす様子の漫画をインスタグラムへ投稿。さらに夫が生産する牡蠣の通信販売の購入者数を増大させたSNSの情報発信などの沢山のファンをもつ活動は、ITを使いこなす田舎暮らしの先駆的なライフスタイルであると高い評価を得ました。

■受賞の内容

「いつかは故郷へ帰りたい」子どもが生まれたことをきっかけに脱サラしUターンしたいと、突然寡黙な夫がA4コピー用紙2枚にびっしり書かれたプレゼンシートで提案してきました。誰も知らない土地への移住や収入面などの不安が大きかったので、2人でしっかり話し合い当時アパレルショップの店員だった私（妻）も一緒に退職し、2016年12月に埼玉県から京都府舞鶴市へ移住。1歳と2歳の子どもを抱えて海と山に囲まれた舞鶴での田舎暮らしを始めました。

牡蠣の養殖と販売を中心にした漁師の家業を引き継いだ夫をサポートし、慣れない土地での子育て、義実家での同居生活をしながら、海のすぐ近くにある築100年の古民家を借りて、夫婦で大規模なリノベーションして新生活をスタートさせました。

夫と共に牡蠣の通信販売をはじめるにあたって、生産者の顔やライフスタイルが見えることが、購入者から信頼を得るために重要であると考えて、子育ての様子や元気に楽しい田舎暮らしの様子を自分の得意技を活かして漫画でインスタグラムへ投稿しはじめました。インスタグラム漫画に共感する子育て世代からの支持の大きさから「たのしいことを拾って生きる。（著者名：まりげ　大和書房）」が出版されました。

海のそばの古民家で5人暮らしをし、夫と協力し合いながらやんちゃな三兄弟の子育て中心の生活です。得意技が認められて、様々な企業からイラスト制作の依頼がくるようになりました。

夫が生産する「朝どれ殻つき真牡蠣」も生育状況や水揚げの様子をＳＮＳでアピールし全国へ通信販売の売り上げを伸ばしています。「京都にも海があったんですね！」「こんなに新鮮な牡蠣をはじめて食べました！」などの声が届き、特産品の「牡蠣」とともに舞鶴市のまちの良さも全国発信中。

ムール貝や牡蠣を使った燻製オリーブ漬けの加工品作りではパッケージデザインやホームページを制作しました。また、夫の祖母に農業を教わり米や野菜作りも始め、それらを市内の直売所などで販売しています。

地元行政等へは、移住者の視点で子育てしやすい地域の在り方等を提案し、経験者として東京や大阪などの移住希望者向けのセミナーで、移住のリアリティを伝えています。

さらに空き家を購入し、夫婦でセルフリノベーションを行う様子をYouTubeで発信し、地方の空き家を低予算でリノベーションし賃貸物件として貸し出すモデル事業を始めています。自身制作のLINEスタンプ収益金を子育て支援団体NPO法人フローレンスへ寄付もしています。

これまで本当にたくさんの人に助けられてきました。心配事や将来への不安だった頃を思い返す中で、舞鶴でこんなに充実した毎日がおとずれるとは想像すらしていませんでした。今後も心豊かに充実した生活を、ＳＮＳを通じて発信し続けたいと思います。

■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】3年
【地域での実践活動】3年

■写真の説明

・（写 真 左）リノベーションしたキッチン
・（写真中央）東京での販売会
・（写 真 右）・「たのしいことを拾って生きる。」
　　・朝どれ殻つき真牡蠣の加工品

■連絡先　Instagram　marige333

オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

霧島ふもとの駅　代表者　和田　新藏さん（80才）　（鹿児島県霧島市）

スーパーがなくなり、困った人たちを見かね、私財を投じ作った物産館は、農作物を販売する場所ができ農家にも利益をもたらしました。地域全体のことを考え、地域のお父さん的な役割を担いながら、本人も含めて地域に暮らす人々の生きがいづくりに貢献。御年80歳、次の目標にむかって行動する姿は素晴らしいライフスタイルと高く評価されました。

■受賞の内容

19歳の1958年に故郷、鹿児島県霧島市牧園町から就職列車に乗り大阪で就職。

自然豊かな故郷で子育てをしようと1985年3月妻と子供二人を出身地牧園町に移住させ、和田氏は仕事の関係で単身赴任の形で大阪府枚方市に在住したまま月に1回、1週間程度帰郷する生活を23年間過ごしました。

1989年から2007年までの18年間は、大阪府枚方市印田町街づくり促進会の代表発起人、事務局長を務め印田町で、地主から借りた土地をラジオ体操等の「ちびっこ広場」として利用し、その後その広場の代替地を探すため、新しい地主の了解を得て要望し、市営公園にしました。

故郷では450年前、島津の殿様が作った東光寺の跡地に麓地区の墓地を改葬する事業が1984年3月にはじまり、発起人会の事務局長となり、関西、関東の墓地所有者の意向確認調査に3年かけ、改葬事業に10年を費やして、牧園中央霊園と生まれ替わりました。その後、2007年3月に故郷に戻り、30年間耕作放棄地だった田を優良農地に甦らせ、近所の牧園小学校と麓地区街づくり促進会と地元のお年寄り総勢130名参加したサツマイモの苗植え祭り、収穫祭、さらに物産館での販売体験を実施させました。

2014年、近くにあるJAのスーパーが閉鎖し自動車の運転のできない高齢者の買い物難民化を打破するために「終の棲家(自宅）)を取り壊して、隣接地を買い増しして、物産館「霧島ふもとの駅」（施設300坪、総面積1200坪駐車場60台）は公的資金を使わず建設。和田代表をはじめ約10名が出資して2018年7月21日にオープンしました。

霧島ふもとの駅は、「子供達の体験学習の町づくり」を大きなテーマに掲げ、新鮮野菜や加工品を販売する「笑顔市場」、飲食を提供する「笑顔亭」、軽食コーナーの「茶ちゃランド」3つの機能をもつ交流拠点です。それぞれの名前は、小中高生から公募して命名しました。地元の皆さんの交流の場として、スタッフは約20名、出荷者は約190名。地元の雇用の場として貢献しています。

今後は、100年続く街づくりの礎として、子どもたちの体験学習のプログラムづくり、昔懐かしい小川でメダカや沢蟹と遊べるような親水公園づくり、誰もが汗を流して農作業できる市民農園、都市部からUJIターンしたくなる移住者団地などの構想実現に取り組みたいと、80歳の今も情熱を燃やしています。

■受賞者と農山漁村との関わり

【移住】12年（Uターン）
【地域での実践活動】35年

■写真の説明

・（写 真 左）霧島ふもとの駅前で和田新藏さん
・（写真中央）収穫祭「耕作放棄地に愛の手を！！」
・（写 真 右）霧島ふもとの駅全景

■連絡先

〒899-6507 鹿児島県霧島市牧園町宿窪田2125-1
☎ 090-7357-7127

第17回オーライ！ニッポン大賞の概要

●趣　　旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くＰＲすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

●表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

（1）募集の対象

- **学生・若者カツヤク部門**　主に30代までの若者の活躍により推進されている活動
- **都市のチカラ部門**　主に都市側からの働きかけによって推進されている活動
- **農山漁村イキイキ部門**　主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

（2）表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）１件
オーライ！ニッポン大賞　３件程度
審査委員会長賞　３件程度

（3）審査の基準

新 規 性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独 自 性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取組みであること。
持 続 性	法人化や収益向上等により持続性の高い取り組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取組みであること。
効 果 性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社 会 性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

オーライ！ニッポン　ライフスタイル賞

ＵＪＩターンにより都市から移住した人、もしくは都市と農山漁村を行き来する二地域居住者等のうち、農山漁村において魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の共生・対流に貢献している個人。

（1）表彰の種類

ライフスタイル賞　３件程度

（2）審査の基準

新 規 性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独 自 性	個性的で魅力のある活動であること。
継 続 性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

第17回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長　安田　喜憲　ふじのくに地球環境史ミュージアム館長（オーライ！ニッポン会議副代表）
井上　和衛　明治大学名誉教授
岡島　成行　公益社団法人日本環境教育フォーラム会長、学校法人青森山田学園理事長
志村　　格　一般社団法人日本旅行業協会理事長
長岡　杏子　株式会社 ＴＢＳ　アナウンサー
平野　啓子　語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
元石　一雄　ＮＰＯ法人水と緑の環境フォーラム常務理事

オーライ！ニッポン会議　事務局

（一財）都市農山漁村交流活性化機構内

〒101-0042　東京都千代田区神田東松下町45番地　神田金子ビル５階
TEL 03-4335-1985　FAX 03-5256-5211
https://www.kouryu.or.jp/service/ohrai.html